２０２２年（令和４年）夏号　No.33

日本ハリストス正教会教団　東日本主教々区宗務局
980-0021　仙台市青葉区中央 3-4-20
Tel (022)225-2744/Fax (022)224-3080
e-mail　orthodox@hyper.ocn.ne.jp

教会学校だより

播(ま)かれた種(たね)

The Eastern Diocese of the Orthodox Church in Japan

神の子

司祭ルカ田畑隆平

『怒りたくて怒ってるわけちゃうのになぁ　子どもも大人もしんどくない子育て』というコミックエッセイの著者きしもとたかひろさんが、次のようなことを言っていました。

「セルフレジで子どもにやらせている場面、『子どもは大人に付属しているもので公共の場では大人がコントロールすべきもの』と見たら、遊ばせたり甘やかしているように感じてちゃんと管理しろよって思うのかもしれないな。けれど、逆に『子どもはひとりの人で大人が付き添っている』と思って見てみるとその子がその子の生活のために必要なものを自分で買っている(のを横で大人が見ている)だけだから、ゆっくりでいいんだよね。」

私たちは子供を連れて外に出ると、「誰かに迷惑を掛けはしないか」ととても気を使い、必要以上に人目を気にしてはいませんでしょうか。

「人に迷惑を掛けない」というのは素晴らしいことですが、私たち自身が人に迷惑を掛けていることは棚に上げて、それが我が子となると、決して人に迷惑を掛けさせる訳にはいかないと、彼等を操り、支配しようとしてしまうのです。そしてその理由は、「迷惑を掛けた相手に申し訳ない」というよりは、躾の出来ない親として自分が見られることへの恐れが大きいのではないでしょうか。つまり私たちは自分勝手な理由から、子供の人間としての尊厳を踏みにじっているのです。このことが、子供をどれだけ悲しませているでしょうか。「無償の愛」で愛されているのは、実は子供ではなく私たち親の方なのです。それなのに私たちは子供の愛に甘えて、彼等を軽んじ、傷付けているのです。

それでは、どうすれば私たちは変わることが出来るでしょうか。聖書にこのような言葉があります。**「主を畏れることは知恵のはじめである」（箴言 1:7）**私たちは、まず神様に目を向けることによって、本当に大切なことは何かということを、徐々にですが知っていくことができます。子育てには明確な答えや一律のマニュアルはありませんが、神と共に歩むことが、私たちに確かな道を教えるのです。そして何より、私たち自身が子供から許されていることを決して忘れないようにしましょう。私たちは親ですが、同時に親も子も、みんな**「神の子」（ロマ 8:14）**なのです。共に神様の子供として、赦し合い、愛し合い、尊重し合う家庭を築きたいものです。

みんなでキャンペーン

上磯ハリストス正教会
マルファ佐藤直美

▲聖歌練習をする若者たち

聖歌隊奉仕はコロナ禍にあって聖歌隊全体の練習を設けるのが非常に厳しい中、若い層が中心となって有志の聖歌練習を続けていた。若者層の歌声は澄んでいて参祷者や既存の詠隊員にも刺激となるものであった。

その流れから、これまで巡回日の晩祷は晩課式だったものを1月の降誕祭から徹夜祷へ変更し現在も継続している。徹夜祷、祭日祈祷も経験し、かねてから上磯教会の信者さんに体験して欲しかった大斎祈祷にも与かる事に繋がった。巡回教会でありながら自分達の教会で大斎祈祷に与えかれたのは参祷した者達に何かを残した。聖歌隊からは「もっとこのお祈りに参祷したい」や参祷者からは晩堂大課の「万軍の主よ我等と偕にせよ～の聖歌が良いね！」と言ってもらえた。上磯教

この2年ほどの間に上磯教会では青年層の活動が活発になり、俄かに活気づいている。要因と考えられるものを述べると、20 代 30 代の若者が継続的に聖歌の奉仕を重ねている事、その家族が参祷する様になった事、開教150年の記念行事に向けて実行委員を立ち上げた事、婦人会の奉仕活動が活発化している事などがあげられる。

▲1 月の降誕祭から始まった徹夜祷

▲函館の聖歌隊有志の応援を得て祭日徹夜祷実施

▲大斎平日の晩堂大課の様子

▲先備聖体礼儀にのぞむ

会で大斎祈祷の後に復活祭を迎えるのは初の事！今年の復活祭は喜びの大きい復活祭となるであろう。管轄神父から「機が熟したからできるでしょう！やってみましょう！」という言葉に緊張はしたが達成できた後には喜びが大きく、今以て上磯聖歌隊は進化している最中である。

▲1 月に行われた信徒総会

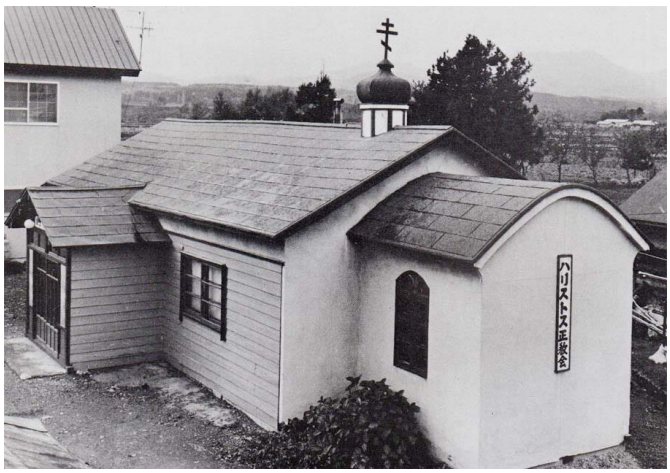
ここ数年は新しい試みや提案が多い年であった。宣教委員として開教 150 年の相談を管轄神父にしたところ、信徒総会にて担当者を指名し復活祭後には第一回目の実行委員会を開く予定である。50 代の青年層が中心となって既に人員集めの呼びかけをしている。代表担当者は 2 名であるが 1 人でも多くの人が関わって後に青年会として今回集まったメンバーが教会を牽引して行くことを期待する。

▲2 月に行われた婦人会総会

更に教会の要とも言える婦人会も役員を改選し新しい活動を模索している。コロナ禍に於いて主日昼食会は中止の状態が 2 年以上続き昼食当番の実働がゼロとなり、参祷者の人数にも影響が出始めている。そこで、昼食会の当番は聖堂の掃除当番と改めて奉仕する予定である。また、復活祭に備えて玉子染めを婦人会行事として初めて行う事にした。この玉子は参祷者や墓地祈祷で配る他、今回は販売用の玉子も用意した。販売方法や染めるコツは函館教会の皆さんに聞いたり、マトシカに指導いただき準備万端である。

婦人会行事や開教 150 年記念行事については総会や都度「お便り」などで全員が知れるよう意識している。「みんなでキャンペーン」なのである。

まだ始まったばかりだが、管轄神父が着任時に「1 人も取りこぼさない」と言った言葉がずっと残っている。これから上磯教会では執事会や婦人会を中心に全員で教会の将来の為、自分達の救いの為に一丸となり、みんなで研鑽を積んで行きたいと思う。



▲旧有川正教会会堂

▲現在の主の昇天聖堂

SF 寓話 「意味」こそはすべて

作：ダヴィド水口優明

航星日誌、宇宙暦 GNSS3.124、我々は、宇宙連星安和機構より依頼を受けて、とある星へ調査旅行をしているところだ。しかし、その途中、通りかかった近くの惑星から発信されている救助信号をキャッチした。宇宙法 LK10.2537 に従って、我々はその惑星に急遽立ち寄ることになった。私の片腕であり良き友人であるミスター・コップスと共にその惑星に降り立ったのだが、しかし、その星は一見平和そうに見えた。

「船長、人々の様子から見ても、また天候や地殻のスキャニングの結果からしても、救助を求めるような事件事故や天災は起きていないようです。救助信号の受信は間違いだったとしか考えられません。そうでないと論理に合いません」とミスター・コップスは私に言った。

「とにかくその救助信号が発信されていると思われる所へ行ってみよう」と私は答えた。

そうしてたどり着いたところには、ある老人が座っていた。彼は、我々が口を開く前に語り始めた。

「やあ、ようやく来てくださった。長いこと待っていたのじゃ。なに、貴兄たちの質問はわかっておる。天変地異も災難も起きていないのになぜ救助を求めたのか、と。実は、私達の星ではもう長いこと、『意味』を喪失する現象が起きているのじゃ。人々はみな、それが楽しいことにせよ、悲しいことにせよ、快適なことにせよ、苦しいことにせよ、「なぜ」「何のために」それらが自分に起きたのかについて、意味を見失ってしまっている。これでは、私達は無意味に生きていることになり、私達はもはや私達でなくなってしまう。どうか、この意味喪失現象を止めて、私達に『意味』を見出せるよう心の目を回復して欲しいのじゃ。」

私はその救助信号の意味を理解した。しかし、我々には今すぐどうすることもできない。「必ず、あなた方をその状態から救済できる人材を見つけて、送り届けましょう」と約束することしかできなかった。

航星日誌、宇宙暦 WJSS39.1735、我々は計画どおり、調査対象惑星に到着した。しかし、そこは何の変哲もない星のように見えて、過去の歴史を調べても、なぜ調査にはるばる来たのかもわからないほどであった。ただ、その星の人々は、苦難に遭ったり、不条理なことを経験したとしても、それを乗り越える精神的な力をもっている、という点は見逃せなかった。

その星の代表者は我々に言った、「そうなのです。私達は、あらゆること、あらゆる体験に『意味』があることを知っているのです。そしてその『意味』を理解できる力を得ているのです。だから、この星の人たちはたとえ艱難辛苦があってもしあわせを失わないのです。」

ミスター・コップスは、私の同意を得て、代表者に「実は、この星とはまったく逆で『意味』を喪失している星があるのです。『意味』を見出す能力を彼等に授けられるような活眼の士を、ぜひこの星から派遣していただけないでしょうか」と懇願した。

代表者は心安くうなずき、ある人物を紹介してくれた。私は、かの星に遣わされるためにやってきた青年に「あなたの名前は何と言うのですか？」と聞いた。

彼は答えた、「はい、私の名前は、J・D・カサートキンです。」

春

司祭エフレム後藤悠太

北海道に移り住んで３年ほどが経ちましたが、こちらに来てから、春がこんなにもありがたいものなのかと実感しています。もちろん、冬は冬なりの良さがありますが、「しばれる」寒さと雪かきに追われ、悪天候の中で車を運転しなければいけない日々から解放されるだけで、春が来たという実感がわいてきます。一年中ほぼ雪が積もらない神戸にいた時には、春が来ること自体にこれほどの感動はありませんでした。

正教徒にとって春といえば、やはり「復活祭」です。各地の教会の会報を読ませていただきますと、コロナ禍にありながらも兄弟姉妹とハリストスの復活の喜びを分かち合えた、という楽しさが伝わってきます。

復活祭の次の主日には「フォマの主日」の奉事が行われます。司祭の巡回する都合、どうしてもこの奉事を行えない教会が多いと思いますが、「フォマの主日」の祈祷文を見ますと、「春」を迎えた喜びが伝わってきます。

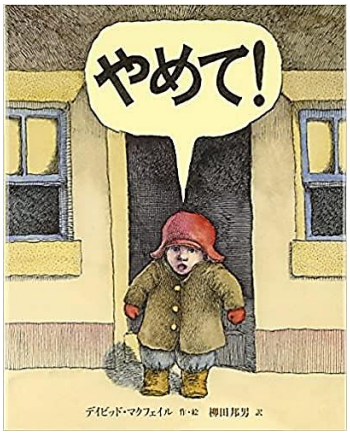
「今は霊の春なり、蓋ハリストスは三日目に墓より日の如くに輝きて、我等の罪の暗き冬を退けたり、彼を歌わん、光栄を顕したればなり。」（フォマの主日　早課カノン第一歌頌）

春は植物が新たに芽吹く時です。そして私たちも霊的な意味で新たに生まれ変わる時です。まさに「霊の春」なのです。古代では復活祭は洗礼を受ける日でした。啓蒙者はハリストスと共に死に、ハリストスと共に復活します。そして私たち信徒も復活祭を迎え、あらためて復活した主と出会い、信仰を新たにし、春の植物のように生まれ変わるのです。

ただ実は「春」という言葉は、復活祭を迎える前から、教会で聞くことができます。復活祭の前には、その準備とも言うべき「大斎」の期間が教会にはあります。聖堂の覆いは黒いものに変えられます。平日の祈祷は聖歌ではなく誦経が主体で、連祷は斎調のメロディになります。伏拝が増え、食の節制もあります。ただ大斎には一般的にイメージされるような暗さはありません。斎は自らに苦しみを課すことでもなければ、敬虔ぶったり、感傷的になったりすることでもありません。「大斎準備週間」ではこのような祈祷を聞くことができます。

「斎の春、痛悔の花は輝けり、故に兄弟よ、我等は凡の汚より己を潔めて、光を賜う者に歌いて言わん、獨人を愛しむ主よ、光栄は爾に帰す。」（乾酪週間水曜日　晩課）

大斎は「斎の春」と呼ばれていますように、私たちにとって光と喜びに満ちた期間です。復活祭に向けて刻一刻と暖かくなっていきますように、復活祭は確実に近づいてきます。大斎は悪魔との闘いの時でもありますが、愛、喜び、平和、寛容といった聖神の実が花開く時でもあります。痛悔の涙を流す時でもありますが、神からの赦しをいただく喜びに与る時でもあります。そして何よりも、春の芽吹きのように、私たち自身が新たに芽吹く時なのです。この喜びを携えて、また一年信仰生活を送ることができますように！



や め て ！

司祭ステファン内田圭一

「やめて！」という題名の絵本があります。文字はほとんど無くて、絵だけでお話が進んでいきます。小さな男の子が「だいとうりょうさま」に手紙を書き、投函しに出かけます。黙々と歩いていく頭上を爆撃機の編隊が飛んでいき街を破壊しています。すれ違った戦車は住宅を砲撃します。銃剣を持った兵士たちが子供たちの暮らす住宅のドアを壊して押し入ろうとしています。ポストにたどり着くとそこには大きないじめっ子が居て、男の子の帽子をはね飛ばし、胸ぐらを掴んで殴ろうとします。

その時、男の子は「やめて！」と言います。これがこの絵本に出てくる最初のセリフです。するといじめっ子は「やめてだって？」と聞き返します。まさかこんな小さな男の子が自分に抵抗するはずがない、何かの間違いだろうと思い直し、また殴りかかろうとします。そこで男の子はもう一度、はっきりと言うのです、「やめて！」と。いじめっ子は気圧されてへたり込み、男の子は手紙をポストに投函することができました。

帰り道、世界が変わっていきます。兵士たちは銃剣を置いて子どもたちと和解し、戦車は鍬を付けて畑を耕し始め、爆撃機は男の子といじめっ子が仲良く乗るための自転車を落としていきます。

もちろん、これは創作されたお話です。現実の世界はそんなに簡単には変わらないかもしれません。けれども、人間が意思を持って、悪いこと、間違ったこと、理不尽なことに対してしっかりはっきりと「やめて！」と伝えることの意味と大切さを、この絵本はとてもよく教えてくれます。

残念なことですが、世の中には悪いことを悪いと言えずにずるずる続けられてしまった結果、とんでもない悲惨な大事故大事件になってしまったということがしばしば報道されます。利益ではなく安全を最優先していたならば、悲惨な事故は起こらなかったのではないか。ちょっとふざけているだけだと見て見ぬふりをせずに注意していたら、いじめを止めることができたのではないか。これはしつけなのだ、これは指導なのだと誤魔化さなかったら虐待もハラスメントも未然に防げたのではないか。事故や事件が明るみに出ると多くの人たちがそう言い立てます。それなのに、同じような事故や事件は無くなりません。

10 年前にバス事故で身内を亡くした方は 4 月に知床沖で起こった観光船事故の報に触れ「過去の事故を他人事と軽視していたのでは」と述べました。その通りなのでしょう。私たちの多くは自分にとって好ましくないことや面倒くさいことからは都合よく目をそらし、自分には関係ないことだと思い込んで疑いもしないのです。

「やめて！」の作者はあとがきで、「大人たちが暴力をなくそうとしないで、どうして子どもたちの世界からいじめをなくすことができようか。」と問いかけます。どうでしょうか？　私たちは、子供たちのいじめと世界で行われている暴力とを結び付けて考えたこともなければ、それらが自分自身と関係あることだとも思っていなかったのではないでしょうか。

私たちが子どもたちを良きハリスティアニンとして正しく育て導いていこうとするならば、子どもたちが私たち大人をちゃんと見ているということを心得なければいけません。まず私たちが、悪いこと、間違ったこと、理不尽なことを、自分自身の意思でしっかりはっきりと否定するということが、子どもたちを世の光、地の塩として成長させていくことに繋がります。

主の福音を恥じない

司祭ピーメン松島拓

この原稿を書いている 5 月初旬時点で、ロシアによるウクライナ侵攻はいまだ解決の兆しも見出すことができずにいます。日本の正教会の信徒の皆さんも、心中穏やかではないのではないでしょうか。同じ正教を信じる人々が、侵略し、殺し、殺されるという状況に、正教への信仰そのものが揺らいでしまうこともあるかもしれません。

そのようなときに私たちは努めて冷静でなければならないでしょう。たとえ国民の多数が正教徒であるロシアがひどい暴力的侵略をしていたとしても、正教そのもの、ハリストスの福音そのものが間違っているわけではないからです。ロシアへの失望を正教への失望に短絡させてはならないのです。

世の中のメディアや口さがない人々の声が自分たちを非難しているように聞こえることもあるかもしれません。「ロシアの暴走は正教会のせいだ」「正教会は邪教だ」「人殺しの宗教だ」そういうひどい言葉を受けたという、そんな話も聞こえています。

しかしそれでも私たちはハリストスの福音を投げ出すわけにはいきません。主が私たちに教えてくれた大切な掟を思い出しましょう。**「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ（ルカ 10:27）」**。私たちの信仰の大切な柱は「神を愛すること」と「隣人を愛すること」です。そして**「もっとも小さい者（隣人）の一人にしたことは私（神）にしたことと同じ（マトフェイ 25:40）」**です。つまり神を愛することとは全ての隣人を愛することと同じことです。また**「自分を迫害する者のために祈れ（マトフェイ 5:44）」**とも言われています。このような苦しく、信仰が揺らいでしまうような時こそ、主の最も大切な教えをシンプルに生きるべきです。人からひどいことを言われても怒らず、絶望せず、その人の平安のために祈り、触れ合うすべての人たちを大切に生活を送りましょう。もし私たちが正しくハリストスの福音を生きるのならば、主の光はおのずと内側からあふれ出してきます。私たちがハリストスの光を正しく輝かせることが、結果として主の福音の正しさを世の人々に証明するのです。

逆にこのような状況にあって、正教徒であることを恥じ、信仰を捨てて逃げてしまうのであれば「神に背いたこの時代に、わたし（ハリストス）とわたしの言葉を恥じる者は、人の子（ハリストス）もまた（中略）その者を恥じる（マルコ 8:38）」という主の言葉が重くのしかかります。私たちの兄弟の行いは恥ずかしいものかもしれません。しかしだからと言って、私たちは自らの信仰を恥じる必要はないし、恥じてはならないのです。

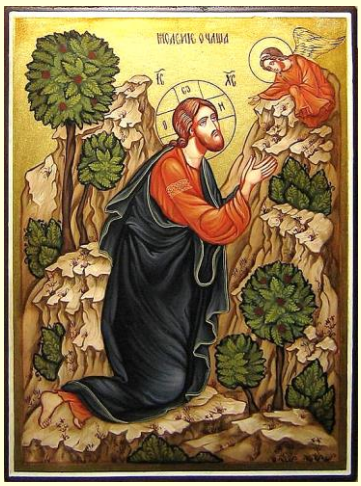
しかしそれは簡単な道ではありません。人が正しく福音の道を歩もうとするときほど、悪魔は辛く苦しい攻撃を仕掛けてきます。「こんな正教なんてやめてしまったほうが楽だぞ」という声が聞こえてくる時もあるかもしれません。そういう時こそ教会に来て祈りましょう。心の内を神に告白しましょう。祈りの時間を皆とともに過ごしましょう。聖体を受けましょう。やがて神から心の平安が与えられるかもしれません。そして正しく福音を生きる力が与えられるはずです。今こそ折れずに、皆一緒に頑張りましょう。

しつもんばこ

Q.　お祈りをして、どんな意味があるのですか？　一生懸命お祈りをしても、願いの叶わない人がたくさんいます。

A.　私たちには、たくさんの願いがあります。例えば健康のことや、試験に受かりますように、友達と仲直りできますように、飛行機が墜ちませんように、などの自分のことから、家族が長生きしますように、友達の病気が早く治りますように、といった自分の周りのこと、そして戦争が早く終わりますように、飢餓で苦しむ子供がいなくなりますように、といったもっと広い範囲のこと、さらには「世界が平和になって、みんなが幸せに暮らせますように」という漠然とした、でもとても真摯な願い事まで、私たちにはたくさんの願いがあります。そして神様は、それらの願いを全てご存知です。私は子供のころ、世界中の人がみんなそれぞれに自分の願いを祈っているのに、神様は本当に全部聞けるのかなぁ？なんて思っていました。しかしそれは愚問でした。なぜなら、「神にできないことは何一つない」（ルカ 1:37）からです。神様を信じるとは、私たちの「髪の毛までも一本残らず数えられている」（マトフェイ 10:30）全てをご存知の方として神様を理解し、その神様には「できないことは何一つない」と信じることなのです。

しかし、神様は何でもご存知で何でもお出来になるはずなのに、これまでに人類が願ってきた願いが全て叶えられてきたかと言えば、決してそうではありませんでした。さらに言えば、ハリストスでさえそうだったのです。ハリストスは捕らえられて十字架で殺される前に、このように祈られました。「父よ、できることなら、この杯を私から過ぎ去らせてください。」（マトフェイ 26:39）これは、私からこの苦難を取り去ってくださいという、ハリストスご自身のための祈りです。ハリストスも自分のために祈られたのです。しかし、この祈りは叶いませんでした。ただ、このハリストスの祈りには続きがありました。それはこのようなものです。「しかし、私の望むようにではなく、御心のままに。」つまりハリストスの祈りには、人としての個人的な願いも含まれていましたが、その上で「私の望むようにではなく、御心のままに」すなわち、「神様のお望みの通りになさってください。私はそれに従います」というのが、ハリストスの真の祈りだったのです。私たちは自分の望みを願うことが祈りだと思いがちです。もちろんそれも必要なのですが、より大切なのは、「私の望むようにではなく、御心のままに」という祈りなのです。



「望みが叶った」とか「叶わなかった」以前に、私たちは祈りを通して、「御心のままに」と心から望むことができない、または自分の望みを優先してしまった自分を知ることが出来ます。ですがそのような自分を知ることにより、「主、憐れめよ」という、心から神様に憐れみを求める心が養われ、私たちは“本当に”祈れるようになっていくのです。そして私たちのうちに「御心のままに」という思いが深まり、神様の望みこそが自分の望みとなったとき、私たちの祈り、すなわち「私の望むようにではなく、御心のままに」という祈りが叶うのです。　（司祭ルカ田畑隆平）